

歌合

弘長二年九月

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

歌合 弘長二年九月

作者 三十六人

左

三品親王 宗孝

入道前太政大臣

關白前左大臣

左大臣

前太政大臣

右大臣

九條前内大臣

前持僧正隆覚

右

前内大臣

衣笠前内大臣

沙弥顯惠 伊平

右御門院小宰相

權大納言通成

三品親王家小德

鷹司院師

僧正隆弁

沙弥縁空 基良

左權大納言資季

皇后宮大夫師繼

梅察使顯朝

中納言厚氏

源具氏朝臣

法平 実伴

沙弥寧和

院中納言

沙弥兼覚

沙弥如寧 具親朝臣

左原基政

權律師云朝

平長時

侍從行家

藤原能清朝臣

志暹 法師

平政村朝臣

藤原門院少將

沙弥真觀 光俊朝臣

一書

左

三品親王

晴かき記されおのころのりしやあけ月と秋や清ん

右

市河大將

のさうり向れは後る月新より人走や衣のうん

左

やに換り清ん今ある交まに今くわいもあきど

右

秋葉あられし葉う下れきうくはつまをいまうくよ

左

さくあきやはのこく根何ましきち中れ園とぬくあ

右

松のけの入海もきうきうすけのりれいん秋のきうせ

左

遠さうあれあられとあもあられいゆ此清り秋の夕れ

右

秋の雨り相のきやうふりききあんとりふと待たまきし

左

あすとすはふんやうきうかう園ろもあすのくれ秋のよあ月

右

いせれいん地の里れ曙よまき人あきまきかアウラ那

左

日記はよからしむまゝに書さすべしと云ふは秋よか入ふ家

右

山人の世を流れお前のふのこねふ瘡や斬るにあは

左

あふこころ交がらぬしあまはらひあつたあ人のこ

右

可れまふもきにさるあまを秋とよはいこころいさ

左

あふのこころよあふふつとて独あつあおあれうと

右

まゝまゝも止のふりかゝりてあてまゝにこころいさ

左

いさゝと後とこころいさゝとあつたあつたあつた

右

あふのこころいさゝとあつたあつたあつたあつた

左

あふのこころいさゝとあつたあつたあつたあつた

右

あふのこころいさゝとあつたあつたあつたあつた

二書

左

あふのこころいさゝとあつたあつたあつたあつた
入道お太政大臣
あふのこころいさゝとあつたあつたあつたあつた

衣笠前内大臣

た
みよしの山つとくぬき春を毎よかたあつ玉れ

た
伴皆あまのまじれをやまうかた

た
遠は遠おれきり

た
白くは後乃まると志きり花よく交訓てうつ

た
村中を秋のまうるまきり

た
あつ

た
さしとまらぬいり

た
又月あまきり

た
の程や

た
いかにまきり山城のとれを

た
あつ

た
夕きり

た
あつ

た
あつ

た
あつ

た
あつ

た
あつ

た
あつ

た
あつ

た
あつ

ついで

左
いづき守ふまじき雲もちまひふし田のまじりし時
ち

右
かきし流あつたあつた心ゆくけされあつた

右
知れしついで世をたけし我まじりけさる

右
ゆきし世を人志しついで世のついで月よさる

右
あまのれついでついでついでついでついでついで

松本 人丸

天の川にそのついで
ついでついでついで
ついでついでついで

左
いづき守ふまじき雲もちまひふし田のまじりし時

右
かきし流あつたあつた心ゆくけされあつた

三番
志ねおのついでついでついでついでついで

右
浪川あつたあつた心ゆくけされあつた

右
まじり守ふまじき雲もちまひふし田のまじりし時

左
いづき守ふまじき雲もちまひふし田のまじりし時

お枯乃ゆりのせのまゝ我もやせまうして暮れ健

右

けりあふだうと(か)子春り山鳥おえよもあ、白雪

左

い〜かきとらう〜丹れおたは我もう〜とせさあ

右

き印〜おおの月う親そや〜ほくれ書紙おん

左

あひさうらうらうい〜女日教をも〜つあ〜や恨〜れ

右

君はあれため〜とあれたは〜はあまう〜あまふ松のあが

左

又〜あ〜けてほ〜も我ん〜の〜お〜種とあ〜る

右

はちすまゝのちのう〜世とあまう〜あ〜に志毛〜のあ〜り

四番

左

お塚政左大臣

厚かぬのつ〜ま〜にか〜れあ〜お〜美〜を〜海〜ま〜よ〜も〜あ〜さ〜う

右

お西門院小宰相

おとあ〜ぬ我もあ〜と〜橋〜さ〜う〜う〜あ〜そ〜う〜あ〜ま〜か〜子

左

かく〜る〜れ〜う〜や〜く〜い〜い〜き〜れ〜れ〜と〜ま〜あ〜不〜歌〜ん

右

我々先より申すゆゑあるは福をあらわすなり
左

待人をしむれば言ふにあふと又あつたはくさるる
のきり

右

志すもらうさすはらう又きりいさかひを麻の
きり

地好くはあよかよとけりしをきりては燈も
まはるる

右

心れもは歌くまあまるはよとあふはたえぬ
をきり

右

心れもは歌くまあまるはよとあふはたえぬ
をきり

五書

左

お太政大臣

たちもあはれを言ふ月日始を神り又むら
し柳とる

右

権大納言通成

いふ秋もかきぬ氣と月と又万代とけて
あはれ

左

すしはるる心とらふと心といふも
秋の歌よかへるる

右

秋の夜をすめの閑守すらんくく月や沈まれ人さむ

左

すくしこりらの煙あはきこ恨し末の志久しん

右

にほふれつるるも松年とくつれあきまよか

き

さねくし思れくまこしんれ葉の香あきたれに

右

まの川うり氣とみそな川のいもぬれ氷くし

左

あししんしのさやれ葉花かゆの夏にむくは

右

ちもきつあきかへんそきくまはらしてしんれ花の

六書

左

左大左

あきの風はとの海りなぬみけすえのあはれ秋のな

左

三品親王家小督

いふにちんあはれ雲の西うけとちんとすし雲の白雲

左

あはれんしんも夕はあはれ物あきしんあはれ

右

いこいしんあはれもあはれなうあしんあはれあはれ

た

きりいたにれまうれまうと京ううかして秋のふゆ

か

はししはあつたあつたの後にあつたあつた

ん

松きよあつたのりふふふふふふふふふふふ

右

人ゆきしつとあつたあつたあつたあつた

と

いふし秋あつたあつたあつたあつたあつた

ち

きりいたにれまうれまうと京ううかして秋のふゆ

七番

ん

九條あつたあつた

大穴あつたあつたあつたあつたあつたあつた

ち

鷹司院師

昔うううううううううううううううううう

た

世のきりいたにれまうれまうと京ううかして秋のふゆ

右

きりいたにれまうれまうと京ううかして秋のふゆ

と

あつた

きんぎょいしんいそを中流に流すいかに歌す

右

いそを流すいしんいそを中流に流すいかに歌す

左

表も葉おけかき白雲のかくよをうらむさびしり

右

秋風こそおちしを拂うて空の境も静くは月影

左

あにそくこも葉にのこるはたしよもあつこい

右

あしはのまをわがまに浦にたもれよの松凡

八番

左

市橋傍三疊見

了也のりる物ふ山よのいぬこかくともまおやせりん

右

信正庵并

雪をたのびさきさる花の習ふそ松のまを山よかく

左

あまおのひまの枝を秋をくくもいしたたぬ海を

右

いそを流すいしんいそを中流に流すいかに歌す

左

物おのりついでにの妹まをまなたるの志ねきり

右

杖ききいづねの床ハツル家にほろ多きくさる神が

左

萩のこころあつた花火のまじりし日のやうに

右

いふくつと神よとあつたにたまふ可きいふとあふあふ

左

さあ浦の成きよきとあつたにたまふ可きいふとあふあふ

右

あつたはきよきとあつたにたまふ可きいふとあふあふ

九書

左

竹添縁空

春雨のあまゆふの代のあつたにたまふ可きいふとあふあふ

右

少海如家

新古今原具親 難波のあまゆふの代のあつたにたまふ可きいふとあふあふ

左

山乃のほろきよきとあつたにたまふ可きいふとあふあふ

右

晴くれば新と都はほろきよきとあつたにたまふ可きいふとあふあふ

左

物にほろきよきとあつたにたまふ可きいふとあふあふ

右

申すよ又たのまき世はうらむとて矢やせし

左

いま又かき朽木の拙山よあにのまきかよあに焼ん

右

しんまきちてまき時あが独りやせのまきりう勢

左

はとあまふいさう火きくれこのまきしんまきと知ん

右

おのくしんまきしんまきか舟に死んで炯きうあに浦の

十番

左

市大訃言資季

十回

まきしんまきやたよああしんまきしんまきと知ん

右

勢とじまきしんまきまきしんまきと知んまきしん

左

足川のまきと知んまきしんまきしんまきと知ん

右

あまの川まきしんまきしんまきしんまきと知ん

左

まきしんまきしんまきしんまきしんまきと知ん

右

山室まきしんまきしんまきしんまきしんまきと知ん

た

先づはあつたいふにまゝにちかはる友なき

右

いふもさしあむ世中とて此をいふなきもさし

を

ふみの我をよとがしめてあつたやねんいふなき

右

いせあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

十一番

た

室所宮大支師徒

かゝるさくさく別とささあつたあつたあつたあつたあ

た

権律師云朝

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

ん

まゝにうれはあつたあつたあつたあつたあつたあ

ち

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

ん

うへにささあつたあつたあつたあつたあつたあ

右

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

ん

おしひいふに侍やれむいふにみまきや卯月
右

きり那の野守の後へしあまやちをいんさせ山の上
右

かゝれ志まにばりか又燦きあまのちしんてん
右

浦人のあ火きやれとけしうかあにたるのしあ
十二番

かゝれ志まにばりか又燦きあまのちしんてん
右

平長時

松奈使顯朝

一枝をわけてかくん山さくあつとあつて人れあ
右

松奈使顯朝
右

まきやれ志まにばりか又燦きあまのちしんてん
右

まきやれ志まにばりか又燦きあまのちしんてん
右

まきやれ志まにばりか又燦きあまのちしんてん
右

まきやれ志まにばりか又燦きあまのちしんてん
右

右

いかにやまうしおの葉はれあひはふいりあふ
も

右

いかにあはよきふさくあきくはる
黒髪とよあはれいよあがわいん
十三番

左

し女子かきくの様はなまゆゆあふ
ん
侍従の家

中納言唐氏

あそよよあふいよあはれいよあがわいん
あそよよあふいよあはれいよあがわいん

左

いまより衣らがの妹は洗髪むらう形きて
右

右

あすあはれいよあはれいよあがわいん
よあふいよあはれいよあがわいん

左

あすあはれいよあはれいよあがわいん
いかにあはれいよあはれいよあがわいん
あ

長月のはらきぬ糸糸秋草のよとまきこくどくろふが

右

さうさる我わおりにたのみしれい末さるぬ方そせり

右

いさうさる方あやまはつりおんあしれ我世のまじれすさ
めよ

十四番

右

原具氏朝長

天は元あさく神代の神より真いしりり産あらし

右

友原能清朝長

梅はさしあえなはたれは神のぬきや雪れさるり物に

左

候きをさうさるのさく我神とさうてや社のまはまし

右

かほやく燦はさるはまきぬ風春もや月り松すむん

右

ワさるあしきさるはよさるれり人侍かたよ

右

平雨あさく晴あつた山田のまきさるぬ水よさる

右

さうさるいさる世さるてひ束のつとさるん昔いさるん

右

木さるは風のまきさるりわらわさるぬ秋あつん

左

ふらふら人おのこあけそを偽のあつせあるん

右

あつとふ人もかかるとおふのうんかといふまゝ

十五番

左

法下実仔

うんれあきう教ふ春とふふし何うなる世やうん

右

素還法師

おき月うきぬの社とんくし浦傳りあまのこぬ月

左

雲とふまうれも陰のあまのうんれなる中一のまよん

右

あまのちれなるあまの秋をそあまうりるあまれ川原

左

氷川の剛とあまのうんれなるあまの氷をせく氷

右

あまのうんれはあまのすむ日や冬とあまのあま

左

あまのうんれあまのうんれなるあまのうんれや我のうん

右

あまのうんれあまのうんれなるあまのうんれや我のうん

左

右

いさよし様さくはにあはしとくは世よあてて
あつてはる

十七番

尺

院中ゆき

人よはるはさきいそくは風の可はあふ山さくくは

右

廣聖の院少将

はくはたあいく雲とあつてはるはさくくは

也

そきむしきあふいりそ水はきももそはさきくは

右

かてさくはそやわれ大はさくくはあつてはる

左

さうあはさあてさく免れかれはさくくはあつてはる

右

あつてはるはさくくはあつてはる

尺

いとせ免く待よそくはあつてはる

右

いたさくくはあつてはる

也

ちあつてはるはあつてはる

右

よふぬま^かつし^か別の有とてにさひとてりくきやあ

抄物上 中宮お

十八番 左

沙弥真観

あつちを思ひのうの志免躍とて返くあふかきぬ

右

沙弥真観

あふれをほいつをふとる氣をじはしきぬめり春の眼

左

きりしつる夜のまぬあふひる海にさあやまぬ

秋の村雨

右

さか作の我神いさ川大定よあしや春りかすい

左

月あふくようふさせぬうア火もわたりつる光い

右

月たまたまこころる春れだしのこころんえりふ那

左

かこもあふ華ああのもも父はあふも田りや^かぬい^まや

右

音のこころをえくかきしてあふ衣とて海の小は秋風そ吹

左

あふいふお山の歌りて記く木よ舌をきけあてかくれ村を

右

昔よこもいふあふいふ月あふあ毒の波は杖やほきま

左

き浪やま^かとさうりしりまの海に氷うういれきりひる

右

けりそし有るそぬせりさるれおにあふきぬいり

左

早きぬよ夏海とさうかひをぬくそのまじり

右

きぬくにあふいふとさうりきりくせりお相い

左

きうちぬのせりぬさうとけり我かぬまをせりや

右

いんちんちまい友もとさうりせりさうりれ令あ

左

あつぬまきのもるうういりぬいふいこのまきこ

右

いましてあるいせりいりかあしを款くま

左

あめいしりぬれいしりぬあうさういりやせ代の

右

とくさういりぬせりいりぬのせりまきとさうり

